

「みやびをと我は聞けるを:Fengliu/Poongryu/Furyu:
東アジアの美的概念検討にむけた(風流)の比較文化史の試み(下)」
『図書新聞』2678号、2004年5月22日

思
考
の
隅
景

韓半島に目を移すと、『三国史記』にみえる新羅の真興王(在位540—576)にその起源を溯る「花郎」が注目に値する。道義をもって互いに錬磨し、歌楽をもって相互に悦み、山水を遊娯するなかで、才能ある若者を互選し登用する、という制度である。孔子、朱子と並んで韓国では尊敬を集めてきた李退溪も美的理念、人格の陶冶としての風流を強調している。韓国では今日も「風流」といえば、「俗事を離れ、風致があり、見事に遊ぶこと。花鳥風月を尊び、韻致のあること」が中心であり、その媒体として詩歌管弦が重視される。「花郎」(ファラン)は、社会制度としては衰亡してしまっただが、今日なお、酒の銘柄として、その生命を維持している。

これら中国や韓国の「風流」と比べると、日本の「風流」は中世以降、大きな変貌を遂げたことが見て取れよう。小学館の『日本国語大辞典』を見ると、「美しく飾ること。数奇、意匠をこらすこと。華奢」などの説明が第三に見え、美的意匠に重きがおかれる。だが、この第三義は中国や韓国では存在しないに等しい。こ

Fengliu/Poongryu/Furyu: 東アジアの美的概念検討にむけた
『風流』の比較文化史の試み・下

みやびをと我は聞けるを

稲賀繁美

国際日本文化研究センター研究員・
総合研究大学院大学助教授

うしたく日本の逸脱)は、早くは「風流者」(ふりゅうぎ)の異名を得た花山院(968—1008)から、永長元年(1096)の大田楽、『中右記』に「金銀の繡、風流ノ過差、美麗凡ソ記シ尽スベカラス」と記録された、大治二(1127)年の賀茂祭などの催し物にその例が辿られる。さらに、常軌を逸したように見えながら、実際には天の志に従う境地を理想とする荘子の「狂」と結び付いた、「風狂」、一休宗純の『狂雲集』に典型を見る脱俗が、そこに異形を添える。ばさらや歌舞伎への変遷のなかでは、1604年、豊臣秀吉の没後七周忌に催された豊国臨時大祭が注目されよう。トマス・ライマーの研究によれば、ここには南蛮渡りのバイゼントを取り込んだ、最新流行の側面が推測できるからだ。そして徳川期に抑圧されたこの風流踊りの熱狂は、今日京都市主催の「大風流」に継承すべく試行されている。

* 関周樞氏(嶺南大学教授)の講演、「風流の東アジア-美を生きる技法-」第168回日文研フォーラム(4月12日)での筆者のコメントを、関氏の許可の元に公表するものである。